

令和4年度入学式 式辞

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。

このまなび野の地に吹く爽やかな春の風と、大地を覆うまばゆいばかりの新緑が、新たな出会いを祝福しています。

本日、新たに学部入学生 103 名、大学院博士前期課程研究コース 2 名、実践者養成コース 4 名、博士後期課程 4 名、別科助産専攻 15 名、計 128 名の皆様をお迎えし、入学式を行うことができますことを、教職員一同、大変うれしく思います。

また、本日の御臨席はかないませんでした。皆さんのこの入学までの道のりを支え励ましてこられた御家族や関係者の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

皆様が入学された本学は、平成9年4月に九州で初めての県立看護大学として開学して25年が経過し、この3月までに総勢2400名余の卒業生が全国に羽ばたき看護を担い活躍しております。

新型コロナウイルス感染症を巡る一連の報道等で、過酷な医療、看護の現場の状況を知りつつも、敢えて本学を選んだ皆さんの志は、非常に尊く、敬意を表する次第です。

今、皆さんは、将来、看護師、保健師、助産師になることを、また、看護教育や研究に携わることをめざし、期待に胸を膨らませておられることでしょう。

また、看護学とは何を学ぶのだろうか、また、どのように研究課題に取り組むべきなのか、友人はできるだろうか、これからの新たな大学生活に新型コロナウイルス感染症の影響はどうなるのだろうか等、不安に思うことも多いと思います。そのような時は、一人で抱え込むことなく、本学の教職員に相談してください。きっと適切な助言がもらえるはずです。

さて、新型コロナウイルス感染症については、国のまん延防止等特別措置は解除されましたが、変異株のウイルスの出現など、この感染症の先行きは未だ不透明な状況で、感染予防対策の継続は求められているところです。

今回のコロナ禍の中で、治療を担う医療施設の看護師や感染症の予防を担う保健所の保健師等の活躍が注目されました。

人は、人が生まれ、育ち、病み、そして老いていく過程においては、自分の力や家族の力では対応しきれなく、専門家による支援や身近で支え続けてくれ

るケアなくしては生きられないこと、そしてこのことが十分に用意されていないと、当たり前の日々が過ごせないだけでなく、社会が維持されないことを、今回、多くの人々が体験し理解したと思います。

その中でも看護職は、人の身近に位置して、人々につながり寄り添う者であり、日々の生活を維持するためには、なくてはならない者ですし、世界に人の命が存在し生活がある限り、それを守る看護は存在します。

そこで看護が大切にしようとしていることは、「人はどのような状況にあっても、その人が「人として尊重され」、「その人が大事にしたいことを共感をもって理解し、それらを全身で大切にすること」であると、私は再認識しました。

看護は3密を避けることを重視しつつ、人の身近に位置して寄り添い、その人が大事にしたいこと、大切にされたいことを守ることです。

また一方で、常に人の「命」と向き合い看護に携わる者は、どのような場面に遭遇しても対応することが求められます。医療がひっ迫することも起きます。さらに、突然武器で攻撃され命が脅かされることが起きています。これからの社会は予測できないことが起き、途方に暮れることも多いと思います。そのような中でも、看護職のみならず多くの方々と共に知恵を出し合い、解決策を生み出すことも看護の役割です。

人の力や思いやりに支えられた医療、健康づくり、そして日々安心して過ごすことのできる社会のあり方を、本学において、今日入学された皆さんと共に追究し、少しでもその改善に資することを創造していく大学でありたいとの思いをお伝えし、「私の式辞」といたします。

令和4年4月5日

公立大学法人宮崎県立看護大学 学長 平野かよ子